

小学生向けSDGs導入教材の開発 —「SDGsまちづくり」の実践を通して—

大鹿 聖公* 加古 颯花**

* 理科教育講座

** 株式会社メイテツコム

Development of SDGs Introductory Teaching Material for Elementary School: Through the Practice of SDGs Town Development

Kiyoyuki OHSHIKA* and Satsuki KAKO**

*Department of Science Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Meitetsucom Co. Ltd., Nagoya 450-0003, Japan

I. はじめに

学校教育における持続可能な開発のための教育（以下「ESD」という。）の活動は、2005年の国連ESDの10年を契機に、ユネスコスクールとの関連から全国的な広まりを見せつつも、学習指導要領上の位置づけや教科での具体的な指導場面が明確に示されず、教員研修の機会も少ないため、その普及が促進されていない現状があった。しかしながら、2017年改訂の小学校学習指導要領では、新たに前文が設けられ、その中で「持続可能な社会の担い手」を育成することが記載され、ESDを学校教育全体として推進していくことが期待されるようになった（文部科学省2018）。

2015年国連において採択された持続可能な開発目標（以下、「SDGs」という）について、日本政府は持続可能な開発目標（SDGs）推進本部を中心に「SDGsアクションプラン」や「SDGs実施方針」の策定を行っている（外務省2021）。また内閣府を中心に「地方創生SDGs官民連携プラットフォーム」や「SDGs未来都市」選定など、企業や自治体などのSDGs推進事業について積極的に支援を行っている（内閣府2020）。SDGs達成のためにESDを促進する新たな国際的枠組み「持続可能な開発のための教育：SDGs達成に向けて（ESD for 2030）」の決議が国連総会において採択され、SDGs達成は教育においても重要な位置づけとなっている（文部科学省2019）。

2020年度からの新しい教育課程で使用される小学校教科書においても、複数の教科においてSDGsに関する記載が取り上げられるようになったが、その扱いは

コラムとしての内容がほとんどである（一例として、毛利ほか2021）。また前述のように、学習指導要領においてSDGsを具体的に推進するための記載が見られないため、学校教育の中で教員自身がSDGsについてどのように教えるのかなど、多くの課題が残されている。

小学校段階において、SDGsを身近に考えさせる題材としてまちづくりがある。小学校を対象としたまちづくりに関するESDやSDGsの先行研究としては、後藤田・中澤（2016）、吉田・三浦（2019）、伊藤（2020）、佐藤（2020）、桑原ら（2021）などが挙げられる。これらでは総合学習や社会科の中で、課題や題材としてまちづくりを扱い、単元や学期を通して児童にESDの視点やSDGsの学びがあったと報告しているが、1時間の授業でSDGsの理解を促す報告は見られていない。

SDGsについての導入や意識付けの教材として、カードゲーム（イマココラボ、金沢工業大学SDGs推進センター）、SDGsすごろく（国連広報センター）、クイズやサイコロ（長岡技術科学大学、JICA地球ひろば）、カード（JICA地球ひろば）など、多種多様なものが開発、報告されてきている。しかし、教材を用いた学校の授業での実践や教材そのものの有効性についての研究報告はあまりない。

そこで本研究では、まちづくりを題材として小学生の児童を対象に、SDGsとはどのようなものか、また身近な「まち」にSDGsがどのように関わっているのかを、活動を通して気づき、学習を進めることができる教材の開発を行った。

II. 教材の開発と概要

小学生を対象とし、1時限の授業で活用できることを想定し、開発する教材では、①短時間で簡単に実施可能、②複雑なルールや事前の学習が不要、③指導・実施するための特別な知識や環境が不要の3点に留意することとした。これらの留意点を踏まえた上で、本研究ではパズルのような感じで建物や施設のパーツを配置することで実施できるまちづくり教材を開発することとした。

教材のねらいとして、まちをつくるという活動を通して、児童がまちに存在するさまざまな建物や施設、そこで働く人々がどのようにSDGs達成に関わっているか考えさせるような内容とした。一例として、学校では児童・生徒に対して授業が行われ、目標の4である「質の高い教育」が展開されていること、里山農家は森林の管理・整備を行い、それが森林に生息する生物の多様性保全につながっていること、というように施設自体や施設での活動が持続可能な開発目標に貢献しているという視点や考えに気付けるものとした。

SDGsの学習を行う上では、それぞれの目標に対して、目標そのものの理解を学び、その上で、様々な職業や施設が貢献していることを理解することが必要である。したがって、まちづくりの教材では、さまざまな建物や施設、またさまざまな環境を準備用意する必要がある。しかしながら本教材では、SDGsを導入するための教材、社会や経済についてまだ十分な学習を行っていない児童を対象とすることを考慮し、SDGsの目標達成に必要な建物や施設の選択や環境を決定するにあたり、以下のような点を考慮した。建物や施設については、小学生にイメージしやすい、なじみがある建物や施設を中心にして、表1に示す建物や施設を取り上げた。取り上げた建物や施設をそれぞれの大きさを考慮して、イラスト付きの建物パーツを作成した(図1)。

また、児童によりつくられたまちから、SDGsへの気づきを振り返るために、選択した建物や施設をどのように配置すると目標が達成できるかについて検討し、達成条件を表2のように決め、これをSDGsチェックシートとした。目標17に関しては、児童が具体的にイメージしやすい建物や施設がないこと、児童が協働で学習を進めることを推奨するため、教材の利用時に複数名が「協力してまちづくりを行う」ことをパートナーシップと捉え、達成条件とした。

まちの基盤となる土地環境についても、具体的な場面設定を行うことで、よりSDGsについて考えることが期待されるが、今回はある一定の社会環境を含む架空の土地環境を設定することで、児童に自由な発想を表現させることを前提に考え、建物などを自由に配置

表1 SDGsの目標に対応する建物・施設

目標	建物パーツ
1	市役所
2	水田, 畑, 養豚場, 養鶏場, 牧場
3	病院
4	学校
5	保育園
6	浄水場
7	火力発電所, 風力発電, 太陽光発電
8	食品メーカー, 住宅メーカー, 生活用品メーカー, コンビニ, ショッピングモール
9	オンラインショップ, 飲料メーカー, 文具メーカー, 自動車メーカー
10	公民館
11	家, マンション, 駅, 公園, 消防署, バス停
12	リサイクルショップ
13	防災センター, 神社, 緑地
14	漁港
15	里山農家
16	警察署, 裁判所
17	なし

できる平地に加え、森林環境と海洋環境を含めたものを設定し、建物や施設を配置するまちの白地図シート(20×22マス)を作成した。白地図シート(図1)は、黄緑色の森林ゾーン(20×4マス)、水色の海ゾーン(20×4マス)、クリーム色の平地ゾーン(20×14マス)で構成されている。

本教材の使い方を以下に示す。まず、教材の利用者に対して、白地図シートと建物パーツを配布する。白地図シートのマス目に従い、平地ゾーンには全て建物を配置するが、海ゾーンと森林ゾーンは建物を配置しても、そのまま残してもよいこととした。まちが完成した後、表2に示すSDGs目標の達成条件に基づいて、17個の目標について、いくつ達成できたかを評価した。SDGsの達成度を確認する過程で、建物や施設がどのSDGsに貢献しているか、どのような役割を果たすかについて気づけるようにした。本教材での達成条件の設定については、例として病院があることで、病気などの治療が行われるために人々の健康が保たれるために目標3に貢献するというように、それぞれの目標に関連する施設がどのように貢献しているかがわかるようにした。また、それぞれの達成条件について、建物や施設がSDGsとどのような関係があるかを示した解説シートを作成した。

本教材での達成度は、現実社会では必ずしもそれだけで達成できないものも含まれているが、あくまで本教材で設定した建物や施設を用いた場合でのゴールとして設定した。

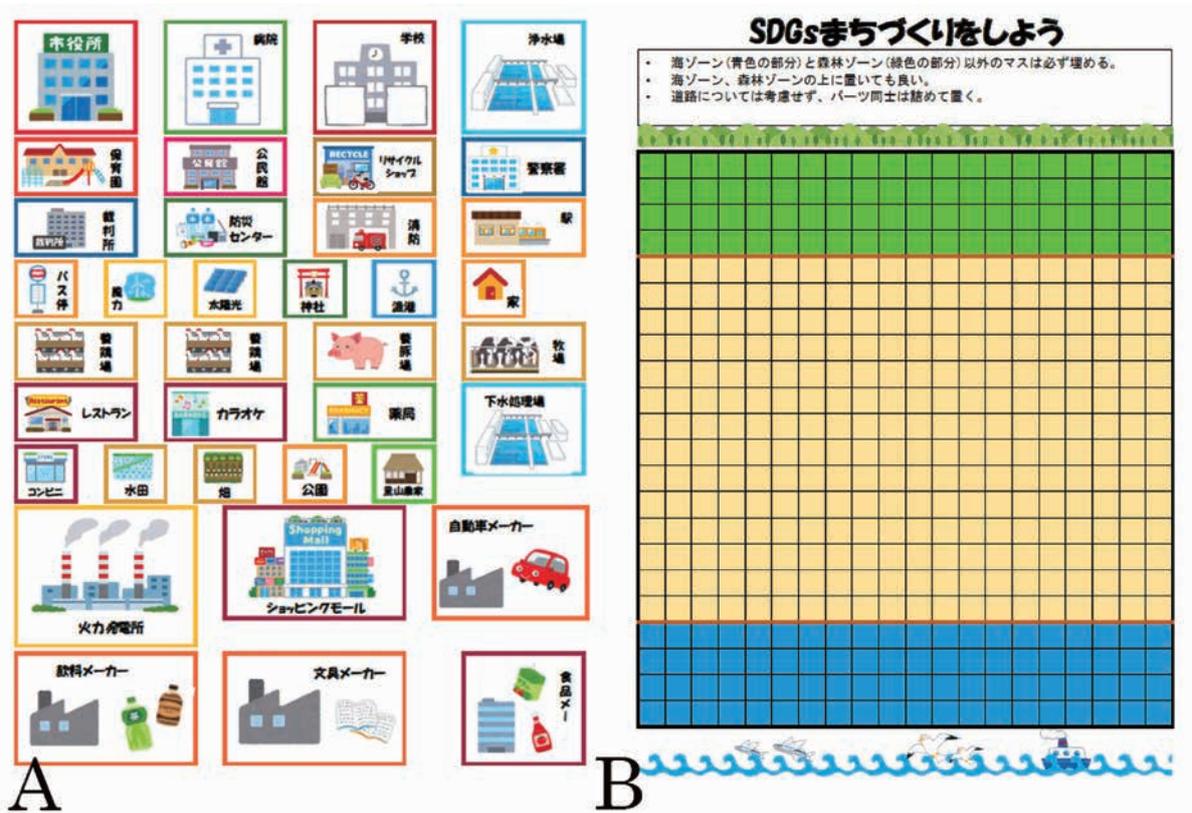


図1 教材シート。A：教材用の建物・施設パーツの一部。B：教材の白地図シート
(上段：森林ゾーン、中段：平地ゾーン、下段：海ゾーン)。

表2 SDGsの目標の達成条件

目標	条件
1	市役所がある
2	水田, 畑, 養豚場, 養鶏場, 牧場が合計10個以上ある
3	病院がある
4	学校がある
5	保育園がある
6	浄水場と下水処理場がある
7	火力発電所がある, または, 風力発電と太陽光発電が合計10個以上ある
8	食品メーカー, 住宅メーカー, 生活用品メーカー, コンビニ, ショッピングモールのうち3つ以上ある
9	ネットショップ, 飲料メーカー, 文具メーカー, 自動車メーカーのうち2つ以上ある
10	公民館がある
11	消防署がある, 駅またはバス停がある, 家, マンションが10個以上ある, 公園が2個以上ある
12	リサイクルショップまたは文具メーカーがある
13	防災センターがあり, 神社または緑地が合計10個以上ある
14	漁港があり, 海ゾーンが50マス以上ある
15	里山農家があり, 森林ゾーンが40マス以上ある
16	警察署または裁判所がある
17	班員と仲良く協力して取り組めた

Ⅲ. 小学校における実践

小学校でのSDGsに関する学習は、理科や社会で部分的に取り上げられるものの、SDGs自体を学習する機会は少ない。そこで、開発した教材の有効性およびSDGsへの興味関心の喚起などを明らかにするため、授業実践を行った。対象には、SDGsと教科学習をつなげることをねらいとし、関連する教科がある3年生以上で実施した。2019年12月、愛知県内の小学校2校(3～6年生)各1クラス(計4クラス, 132名)を対象に教科の枠組みとは別に、特別授業として1時限(45分)で実施した。授業は各学校の担当教員が行った。授業は表3のような流れで実施し、授業の目標を「将来、幸せに過ごせるまちをつくろう」とした。

また授業を通して、児童に以下の4点が達成できるかについて教材の評価とともに調査を行った。

- ①小学校の授業教材として問題がないか。
- ②意欲を持ってまちづくりに取り組むことができるか。
- ③まちづくり教材を通して、SDGsに関心をもち、身近に感じることが出来るか。
- ④まちづくり教材を通して、SDGsについて理解することができるか。

なお、本実践では児童のまちづくり活動に十分な時間をとるため、白地図をホワイトボード上に置き、建物・施設パーツは全てマグネットを取り付け、移動や

配置が自由に行える状況とした。以下に、実践の流れと様子を示す（図2）。

授業の初めに教師が児童に対して、「自分たちが幸せに暮らすためには、どんな建物や施設が必要だろう。」という問いかけを行い、「学校」、「病院」、「老人ホーム」、「介護施設」、「ごみ処理場」、「ゲームセンター」などと答えていた。

グループごとに教材を受け取った児童は、教師の説明を熱心に聞いた後、「緑がたくさんほしい」「工場って必要なのかな」「公民館って何をするとところなの」等と積極的に意見を出しながらまちづくりに取り組んでいた。環境に配慮しながら施設を選ぶグループや、海ゾーン、森林ゾーンにすべて施設を配置するグルー

プもあった。どのクラスでも、すべてのグループがおおよそ20分でまちを完成させていた。

まちづくりの活動後、完成したまちのSDGs達成度を確認し、自分たちがつくったまちを振り返った。「つくったまちの課題点は何だっただろう。」という問いかけに対して、「森林ゾーンをすべて埋めてしまった」、「工場が少なかった」、「海ゾーンを埋めすぎた」、「緑が少ないまちになってしまった」「会社（企業）がなかった」などと答えていた。

授業の最後で、「SDGsを達成するために、自分たちにできることはあるだろうか。」という教師の問いかけに対して、「公民館が何をしているところかわかった」、「自分たちが使っているノートがリサイクルでできていることを知った」、「住みやすいまちをつくるのが大切だとわかった」「みんなが協力しないといけない」などと答えていた。

表3 授業実践の流れ

時間	学習活動
導入 5分	2030年の幸せなまちとはどのようなまちか どのような施設があるといいたろうか
展開 30分	○まちづくり活動 教師による説明 児童によるまちづくり ○完成したまちのSDGs達成度の確認
まとめ 10分	SDGs達成のために自分ができることは何だろうか

IV. 実践結果

1. 完成したまちのSDGs達成度

授業実践を行った4学年4クラス計17グループによって作成されたまちのSDGs達成度をまとめたものが表4である。また、授業実践により児童が完成させたまちの例を図3に示す。

表4からわかるように、全班が達成できた目標は、1, 3, 4, 5, 16の5つ、達成度が50%を下回った目標は、2, 8, 11, 13, 14, 15の6つ、どの班も達成できなかったのは13気候変動であった。グループによって達成できた目標値の平均は10.4であった。この数値は学年が異なっても、それほど大きな違いは見られなかった。この結果から、単純に施設の有無で目標が達成できるものは高く、複合的な条件のものが低い傾向が見られた。

2. 質問紙調査の結果

授業実践後に質問紙調査を行った。調査対象は2校4クラス計132名である。有効回答数をnで表す。質問項目は「まちづくり活動への参加」、「活動を通した



図2 授業風景。A：まちづくりを行っている様子。
B：完成したまちのSDGs達成度を確認している様子。

表4 完成したまちのSDGs達成度

目標	班数	達成度	目標	班数	達成度
1	17	100%	10	15	88%
2	4	24%	11	3	18%
3	17	100%	12	14	82%
4	17	100%	13	0	0%
5	17	100%	14	2	12%
6	16	94%	15	1	6%
7	9	53%	16	17	100%
8	7	41%	17	11	65%
9	9	53%			

SDGsの理解」,「SDGsへの関心」,「SDGs達成に向けた身近な行動」の4項目からなる児童の意識,活動により完成したまちからみた課題,SDGs達成に向けて必要な施設などのまちづくりに関する項目からなる。

活動を通した児童の意識に関する調査結果を図4~7に示す。

授業でのまちづくり活動の参加では,よく参加できた92%,参加できた6%,あまり参加できなかった2%であった(図4)。授業活動を通してSDGsについて理解できたかについては,よくわかった83%,すこしわかった14%,あまりわからなかった2%であった(図5)。授業実践後のSDGsに対する関心については,とても高い70%,高い26%,あまり高くない4%であった(図6)。授業を終えて,自分でSDGs達成に向けて行動できることでは,多くある70%,多少ある30%であった(図7)。いずれの項目でも7割以上の高い肯定的な回答が得られた。

完成したまちからみた課題として,「つくったまちの課題を見つけることができましたか」と尋ねた。その結果,見つけることができた95%(126名),見つけられなかった5%(6名)であった。

まちづくり活動の結果を踏まえ,「SDGsを達成するために,重要な役割を果たすと思う施設について14施設から複数選択させた。その結果を表5に示す。病院,学校,警察署など特有な役割をもつ施設はほぼ全ての児童が選択していた。逆に選択が低かった施設として,公民館,工場,漁港が挙げられた。また,14施設を全て選択した児童の割合を表6に示す。その結果,3,5,6年では80%以上の児童が14施設を選択していたが,4年のみ34%と低くなっていた。

最後に,授業全体を通しての感想などを自由記述させ,その内容を分析した結果,表7の通りとなった。

児童の感想として,活動に関する内容38件,まちづくり教材に関する内容21件,現実のまちについて18件,SDGsに関する内容90件に分類することができた。この結果から,児童がまちづくりの活動を通して,施設の役割をSDGsの活動と結びつけることができたこ

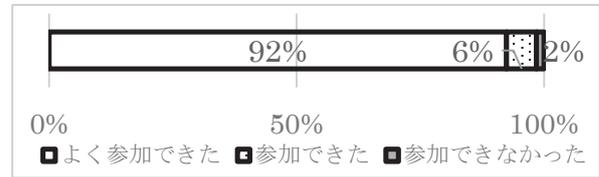


図4 まちづくり活動への参加 (n=132)

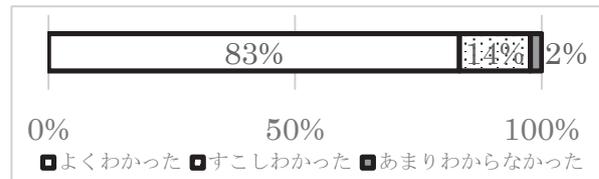


図5 活動を通したSDGsの理解 (n=132)

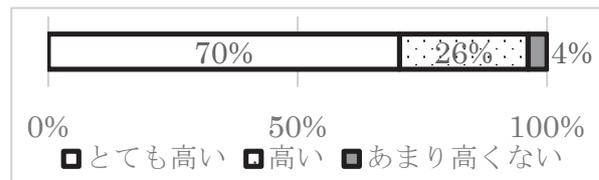


図6 SDGsへの関心 (n=132)

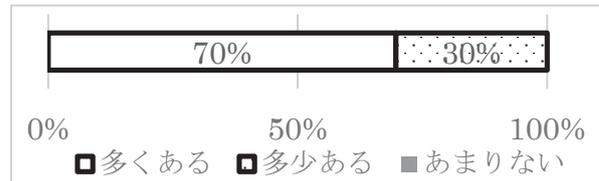


図7 SDGs達成に向けた身近な行動 (n=132)



図3 児童が作成したまちの例

表5 SDGs達成に必要な施設 (n=132)

施設名	割合	施設名	割合
病院	98%	保育園	93%
学校	98%	防災センター	93%
警察署	98%	会社	92%
消防署	97%	田畑	91%
市役所	96%	公民館	89%
浄水場	96%	工場	87%
発電所	94%	漁港	85%

表6 SDGs達成に必要な全施設を選択した児童

学年	割合
小3 (n=34)	88%
小4 (n=32)	34%
小5 (n=35)	86%
小6 (n=31)	87%

表7 児童の感想（自由記述）

分類〔小計〕	具体的な項目	件数
活動〔38〕	楽しかった	14
	もう一度やりたい	7
	つくったまちの課題	7
	むずかしかった	3
	大変だった	3
	気を付けた点	3
	グループ活動について	1
教材〔21〕	パーツ(施設)の役割について	21
現実のまち〔18〕	難しさ	10
	自分が住むまちについて	8
SDGs〔90〕	達成するためにできること	38
	達成する難しさ	25
	理解できた	21
	協力する大切さ	6

と、SDGs達成のために自分の活動を関連させることができたことなどが明らかとなった。

V. 考察

小学生を対象にSDGsを理解するために開発したまちづくり教材を用いた授業実践ならびに調査結果から以下のようなことが明らかとなった。

①小学校の授業教材として適切性

開発した教材を用いて小学3～6年生を対象に1時間（45分）で授業実践を行った。担当した教師により進め方は異なるものの、授業時間内で活動を実施し、SDGsについての理解並びに今後の自身の行動について考えをまとめることまで行うことができた。また、授業を実施した教師から、「専門的な準備も必要なく授業を進めることができた」、「積極的に児童が活動を進めていた」などの感想が得られており、小学校の授業として十分取り扱えると考えられる。

しかしながら、3年生の児童の自由記述において「難しかった」「大変だった」という回答が複数得られたこと、社会において産業など具体的な学習を行っていることから、本教材は3年生以上であれば、どの学年でも活動としては実施できるが、SDGsの達成度と施設との関係について、社会で地域の学習をすすめた高学年の方がより適切と判断された。

②児童が、関心を持ってまちづくりに取り組むことができるか。

質問紙調査の結果から、児童のまちづくり活動への参加ではほぼ全員の児童が参加できていた（図4）。また、自由記述において、「課題がたくさんあったのもう一度やりたい」、「森や海を守りつつ必要な施設を置くのはむずかしかった」などの回答が得られたこ

とから、意欲的に取り組むことができ、自分のグループの課題を見つけ、新たな考え方に気付くことができる教材であると考えられる。

③児童が、まちづくり教材を通して、SDGsに関心を持ち、身近に感じることができるか。

児童のSDGsへの関心については、ほぼ全員の児童が高い結果を示していた（図6）。また、SDGs達成に向けた身近な行動があるとの回答が全員から得られた（図7）。これらの結果から、本教材がSDGsへの関心を高め、SDGsを身近に感じさせることができたと考えられる。特に、図6において「あまり高くない」と回答していた児童であっても図7ではSDGs達成に向けた身近な行動が「多少ある」と回答していた。このことより、SDGsに関心を持っていない児童でも、普段の行動がSDGsにつながる行動になっていることに気づけたと考えられる。また自由記述において、「電気を使いすぎないようにしたい」、「自然を大切にしたい」、「自分にできることをしたい」、「不公平をなくしたい」などの記述があったことから、本教材での活動を通して、普段気をつけていることがSDGsを達成するために必要なことであると改めて自分事として気付かせることができたと考えられる。

④児童が、まちづくり教材を通して、SDGsについて理解することができるか。

SDGsの理解度について、97%の児童が理解できたと回答しており、また、自由記述から「SDGsが仕事やまちと関係していることがわかった」「SDGsがどのようなものかが理解できた」「まちの中でSDGsを達成することは難しいことがわかった」などのように、SDGsの目標を身近な事例と結びつけて理解したり、まちの中の活動や施設と関連していることに気づいたりなど、SDGsの項目や内容に関連する記述が児童の約7割にあたる90件得られ、まちづくり活動を通して、SDGsの理解を促すことができたと考えられる（図5、表7）。さらに、「これからの社会は1つでも多くの目標を達成するために、協力していくことが大切だと思う」、「仲間との協力が大切」などの記述から、SDGsを達成するためには“協力”が欠かせないという目標17の重要性にも気付くことができたと考えられる。しかし、「まちづくりには17のきまりがあるとわかった」「田畑が少なかったのでご飯が食べられない」といった記述があったことから、この教材の達成条件がそのまままちづくりの条件であると誤解している児童が見られた。これらの点について授業後の補足が必要と考えられる。

SDGs達成に必要な施設に関する回答から、本教材で取り上げたどの施設も80%以上となっており（表5）、身近なまちに見られるさまざまな施設や建物がSDGs達成に向けて役割を果たしていることに気づけたと思われる。必要な施設として、病院、学校、警察

署、消防署、市役所と児童が普段の生活圏において、どこにでも見られる施設が重要な役割を果たしていると感じていることが伺えた。

自由記述からも「自分の住むまちの施設について調べたい」「自分のまちにしかない施設はあるのか気になった」などの回答があったことから、仮想のまちづくりから現実のまちへ自分事にすることができたと考えられる。しかし、全14施設が必要と回答した児童の割合の結果から4年生のみ低くなっていた。結果を詳細に分析した結果、工場59%、公民館69%、漁港56%と低い施設が明らかとなった。高学年では、社会の学習において工業や農業などの学習により施設の役割について理解できているが、4年生では社会で産業について学習が始まった段階で、施設の役割の理解において児童の差異がみられ、結果として要不要が分かかれ、低くなったと考えられる。逆に3年生が高かった理由は、施設の役割についてあまり認識していない結果と考えられる。

以上の分析結果から、本教材はSDGsの導入として活用するものとして適切と判断できるが、学習を深めたり自分事にしたりするためには、理科や社会など他の教科と関連させながら進めていくことが必要であると判断される。

VI. 今後に向けて

本研究によって開発したまちづくり教材は、小学生に対してSDGsを導入するための教材として適切であると判断することができた。また、児童がSDGsの目標を理解し、地域の建物や施設と関連していることに気づき、SDGsを自分事としてとらえ、行動を促すことができた。本教材を用いた授業を起点に、社会における地域の水資源やごみ・資源のリサイクルの学習へと、理科では、科学技術との関連や、自然災害に対する防災へと、家庭科における食生活や消費生活などの学習におけるSDGsとの関連へとそれぞれつなげることが容易になるとと思われる。

今後は、本教材の課題について、他教科との関連や地域の特徴を具体的に取り入れ、児童にとって身近なものとして実施できるように改良することが必要であると思われる。

謝辞

本研究の実践にあたり、愛知教育大学附属名古屋小学校藤本和哉教諭、河合彰浩教諭、出口敬祐教諭、愛知教育大学附属岡崎小学校鈴木大介教諭に協力をいただいた。ここに深く感謝の意を表す。

註・付記

本研究で開発した教材は、2021年度から、愛知県環境学習プラザの特別プログラム（一部修正版）として体験することが可能である。

引用・参考文献

- 一般社団法人イマココラボ、「カードゲーム「2030SDGs」の紹介」<https://imacocollabo.or.jp/games/2030sdgs/> (2022年8月28日最終閲覧)。
- 外務省 (2021) 「JAPAN SDGs Action Platform」<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/effort/index.html> (2021年11月20日最終閲覧)。
- 金沢工業大学SDGs推進センター (2021) 「SDGsカードゲーム『THE SDGs Action cardgame「X(クロス)」』」<https://www.kanazawa-it.ac.jp/sdgs/index.html> (2022年8月28日最終閲覧)。
- 桑原敏典・横川和成・高橋純一 (2021) 「小中学校社会科・総合的な学習の時間におけるSDGsを学ぶ授業づくりの方法—環境問題を取り上げたESDの単元開発を事例として—」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』176号, 47-58。
- 国際連合広報センター (2021) 「ゴー・ゴールズ すごろくでSDGsを学ぼう」https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/go-goals/ (2022年8月28日最終閲覧)。
- 後藤田洋介・中澤静男 (2016) 「陸前高田市文化遺産調査におけるESD教材開発(5)-まちづくりを題材にしたESD」『次世代教員養成センター研究紀要』(奈良教育大学)2号, 205-209。
- 佐藤健 (2020) 「持続可能な防災まちづくりと防災人材育成に関する研究—コミュニティ・スクールを核とした防災まちづくり—」『自然災害科学総合シンポジウム講演論文集』57, 53-58。
- JICA地球ひろば (2021) 「SDGsカード」<https://www.jica.go.jp/hiroba/teacher/material/sdgs/card.html> (2022年8月28日最終閲覧)。
- 内閣府 (2021) 「地方創生SDGs」<https://future-city.go.jp/sdgs/> (2021年11月20日最終閲覧)。
- 長岡技術科学大学 (2021) 「長岡技術科学大学が開発したSDGs教育ゲーム」<https://www.nagaokaut.ac.jp/annai/daigakusyokai/sdgs/sdsgsgame.html> (2022年8月28日最終閲覧)。
- 毛利衛、大島まり他 (2021) 『新しい科学6』東京書籍。
- 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領』東洋館出版社。
- 文部科学省 (2019) 「「持続可能な開発のための教育：SDGs達成に向けて(ESD for 2030)」について～第74回国連総会における決議採択～」https://www.mext.go.jp/unesco/001/2019/1421939_00001.htm (2022年8月28日最終閲覧)。
- 吉田剛・三浦秋司 (2019) 「ESDとしての小学校環境学習の実践研究—5学年の社会科を前提とした総合的な学習の時間を通して—」『ESD研究』第2号, 23-29。

(2022年9月14日受理)